

法王累年遂所補住侶清淨香院也而頻
 蒙 敕詔叙法眼住少僧都而後復轉任太
 僧都也三參 内拜賀矣天保壬辰之秋
 有所以而遷于肥之后助天草郡一町田
 郷閑居自稱殘夢道人即嘆曰

身猶如毛

意廣如空

王城春花

邊境秋霧

一世浮沈

百年吟弄

鬼焉惟焉

是夢是夢

雲となり雨ともなりし旅の空

むかへたまへよ南無阿弥陀佛

門人記之

右は尾張尾崎村の碑文であるが、天草島のものとは文面に僅かの相違があるだけである。そしてこの尾崎村の碑は明治のはじめ頃の通信（上人からの）に依ると、名号石の名目で、脇田氏の屋敷内に建立されてゐたやうで、現在の場所へ移されたのは上人の歿後であらうと思はれる。

。此の墓石は恐らく嘉永四五年頃、搬送されて来たものであらう。尾崎脇田家の話によると、三年何ヶ月か、つて天草島から尾崎まで運ばれたとの事であるが、何れにもせよ幕末國事多難な折柄、其上交通も至つて不便な時代に人の手から人の手へ渡つて来た勞力は、実に容易な業ではなかつたであらう。

それは美しい師弟の愛情の発露なのである。なほ門人蓮の

雲となり雨ともなりし旅の空、むかへたまへよ南無阿弥陀佛

の歌は、如何に上人に對する敬愛の念の深かつたか、想像せられ、同時に又上人の門人に對する愛情が、徳化が著しかつたかを証明するものであると思ふ。

現在尾崎村の墓石の前にたつ時、この美談を思ひ浮べ、美しい故人の眞情美にうたれ、誰しも襟を正さずにはおられないであらう。

次いで上人は嘉永元年に、故郷の藥師堂へ阿弥陀佛尊像を寄進しようと思へられ、嘗て上人が智恩院在職時代に拜受せられた尊像をもつてこれに充てられた。

此の尊像は華頂宮院家覺了院大僧正天眞尊者の所藏で、上人の師常三昧院觀譽太上人の傳持のものを更に定舜上人が拜受せられたものであつた。

上人が天草へ渡られた後は知恩院別院寮へ安置されてあつたが、上人が之を御下渡を願はれた所、臣命侍史六位安藤誠之より許狀あり、遂に尾崎村藥師堂へ奉遷せられる事になつた。

この頃、上人の父は常に病氣勝であつたやうであるが、嘉永二酉正月九日に歿せられた。そこで上人のこの尊像寄進の擧は、更に親への菩提のためともなつた。人一倍親孝行であつた上人が、父上臨終の場に居あはす事も出来なれで、山野數百里を隔て、闊々哀惜せられた事は言ふまでもない。

尾崎村へ尊像が届いたのは、拜請の翌年、嘉永二年であつた。當時上人からの添狀は左記の通りである。

尾崎村葉師堂藏

差添納置候書付

一白蓮五重阿弥陀佛尊像

附 茶湯箸

壹鉢

壹個

大伏鉢

壹面

緣起掛物

壹軸

右尊像之儀者知恩院御殿ニ御安置御座候處拙僧
數年御奉事申上候廉を以致拜領別院寮本尊ニ仕
置候處退身之後御下ヶ被下置候様致内願候處、
去々末年春御用人安藤播摩介殿ヲ以御下ヶニ相
成候ニ付、幸当材生緣之由緒も有之且二面親菩提

旁以藥師堂に致寄附置候・就而者向後猶以材方
 衆中一同和熟專信心稱名念佛無退轉御修行有之
 當來一蓮托生之知遇を偏に祈希御座候、仍而爲
 後代差添書付如件

嘉永己酉年七月佛歡喜日

前清淨香院定舜

取次 尾崎村新田

伊石衛門

尾州丹羽郡尾崎村

藥師堂主座并材方御衆中

なほ尾崎材の御請書(尾崎脇田氏藏)は次の通りである。

御請甲上候書付

一 白蓮五重臺弥陀尊像 壹 躰

附 大鉦子 壹 面

右者古來知恩院御殿内ニ御殿内ニ御安置御座候
 尊像貴僧御拜領に相成則御院家寮本尊に被成置

候處当材御生縁之由緒を以爲御双親晋提今般葉
 師堂へ御寄附被成候に付、則堂内へ御安置申上
 住持者不及申村中同行一同別而信仰仕稱名念佛
 長無退轉修行可仕候。依之爲後代御誦書一札指
 上置候條如件

嘉永二酉五月

尾州丹羽郡尾崎村

葉 師 堂 印

同村庄屋

治右衛門 印

石村惣代

藤 七

帝都

故清淨寺院定舜和尚様

取次當村

伊右衛門殿

又上人筆の尊像縁起掛物（葉師堂藏）の全文は左の通りである。

葉師堂中安置彌陀尊之縁起

夫以心隨境而起學則習焉性兮。粵知心性自清淨矣。然吾王緣之鄉一邑悉以淨土爲宗。是以建念佛道場而舉蓮門宗儀以欲教親疎平等發心成行乃予願也。曾在醫王佛之堂。於此亦猶異其修念也。故欲常彌陀佛尊像安置於夫堂也尚矣。偶予亞兄來吾蓮社而殊述其志乃協放吾宿志矣。幸在華原王宮覺了院大僧正天真尊者之所藏而元師常三昧院觀譽大上人傳持之無量壽佛尊像予復傳請之以修繕其盡損而安置之吾院室而拜念奉侍也予辭職後猶在干今於茲復以其尊像欲贈是干吾鄉儻彼求且遂其宿願而奉聞於稱門主大王閣下。大王特有法愛重詔而命侍史六位藤誠之遠降於許狀予嶺社亦篤哉。恭惟尊機度于塞外之慈不堪下情慙慙之至矣。于時弘化第五戊申春拜請其尊像。進發於帝都到于張陽金鱗城北尾崎邨乃安置於夫葉師堂兮。仰惟醫王佛至除病之慈又彌陀佛建往生之願兮。衆二尊之悲願而陶衆救者乎也。翼一鄉之善男善女等常稱名念佛自能所感通成信不退也。斯乃焉存者得衆壽無量亡者離苦生安養矣。

吉水正流前清淨香院法眼大僧都稱阿定舜謹誌

印

其後嘉永四年七月十日には上人の母堂が歿せられた。なほ上人両親の法名は、父は「忠誠庵義道了善居士」母は「瑞雲軒皓月妙吟大姉」である。

越えて安政二年に上人は京都・大阪・伊勢・江戸地方へ旅行せられた。

隨行には上人の愛児良一（十五歳）だけであつた。良一について後に記す

この行は安政二年三月十五日早庵を出發し、富岡から嶋原へ移り、嶋原から長洲の津へ渡つて、後筑前太宰府へ参拜。小倉を過ぎ、下関へ出て、更に中國地方瀬戸内海沿岸を陸路、周防の錦帯橋見物、安藝の宮島参詣。宮嶋から丹路、おんどの瀬戸から鞆の津、讃岐丸亀へ上陸。象頭山金刀比羅宮、善通寺を拜礼して、丸亀から出帆、幡州室津着船、姫路、明石をすぎて大阪へ入つて諸々を見物して堺を過ぎて高野山に参詣せられた。

高野山にて

むねきよく心ものと、すみわたり雲吹拂ふ高野山風

登高野山即事

高峯如八葉

野草暗香凝

鳥似呼三寶

僧懸觀一來

彩雲繞杪靜

瑞靄擁堂昇

想像龍華會

塔前千顆塔

それから高野山を見物して、南都をめぐる、更に京都市中、名所、旧蹟を巡覽、やがて東海道を下つて、関宿から伊勢路をとつて大廟、朝熊山、二見浦に詣で、津から上野——四日市へと出られた。当時のやうすを偲ぶために左に旅行記の一節を掲げてみよう。

十五日

（安政）

晴天

富田出立、桑名城下

（十萬石松平侯御居城あり）

鵜屋にて休息。四ツ

半時衆船舟中にて口号（ぐさ）ざれうた

足やすめのりかげんよし渡し舟旅は命のせんなくぞかし。

七ツ時頃海上七里、尾州宮駅

（当所にて御朱印改あり）

に着舟・熱田大神宮

へ参り、諸社拜参しつゝ、

（当社に日本一の石燈籠あり。佐久間玄番の上る所なり。）

千早振神のめくみのうすからぬ熱田の宮へ参るうれしき。

かくて当宮西の門より出、町家続き百丁餘。名古屋本町七丁目角、桑

名屋半左衛門方に止宿。名古屋御城主徳川大納言御方御高六十二万石なり。

今日道程海上七里陸地四里斗なり。

名古屋金鱗城を見て

日にひかり月にかゝやき我國に二つとあらぬこかね家の城。

十六日 晴天 桑半に滞在。御城並に諸神社、町々店々茅見物、藝物等も

いたし候事

十七日 細雨 同家滞留、所々用弁、再び寺院、町々西本願寺、其外諸方

とも見物巡行す。

十八日 晴天 名古屋出立、御城丸之内通り中下町へ出、枇杷島橋渡り、

長さ七十五間あり。小橋三十間余あり。小田井土手通り、岸倉海道より

出九ツ時過頂同國丹羽郡尾崎村へ無事着（此道五里なり）とりあえず、
いゝ置きし花木の梢もの言はゞ昔の友をとほまじものを。

十九日

曇天

今日先考先妣のおきつぎに参りて

おもかげの心の浪に浮び来て猶なつかしき昔の下かな。

かくあれとなに思ひにきたらちねの撫育けむうなね黒かみ。

二十日

晴日

両日とも雨ふりければ脇田氏のつほねて終日やすらひけるに

人々多く尋ね訪ひけるまゝ、過ぎしこと今の事ども物かたり居ける。

廿二日

晴天

脇田氏の后のみの菩提所飛保材曼陀羅芽（是は淨土西山流て担持の隨一也）

塔中十二ヶ院あり。其中修道院といふは則脇田家代々の宿坊なれば是へ

も参詣。住持は元來やつかれが肉縁あるものにて音詣もいとゞ多し。

曼陀羅寺は賜紫の勅願所、寺領も二百石あり。

廿三日

曇

廿四日晴 滞在同上。

廿五日

曇

八田新田高山興右衛門使者勇助来る。是は伊藤潤慶老肉縁にて書

色の故也。外に名古屋西杉村又國寺禪童和尚より書面到來。同人持参

之事。

廿六日

晴天

同郡小淵村眞野亭助方より赤見村淨福寺（是は超隆といふ知已の僧住職也）

等へ尋問す。尤此日懷吾井伊右衛門（上人の兄）兩人は心願有之、津島牛頭

天王へ参詣。同所に一宿。帰路序に鴻の宮（國府宮）一の宮等所々へも

参り、廿七日夕方小湍へ帰宅。但し尾崎より津島迄五里餘あり。但し往來十里なり。

廿七日 晴天 小湍村眞野氏に滞留。

廿八日 晴天 眞野氏家出立、晝頃尾崎へ帰宅。

廿九日 大雨雷鳴。夕方隣村大海道といふ所に雷火にて百姓家一軒焼失す。

卅日 晴天 下野村 澤木又市方尋問。天より大山城下三万五千石成瀬氏御居成なり。常満寺へ登山。梅山上人の廟参。御城并町々見物。今夕同寺に止宿。

尾崎よりは是迄廻り道にて二里也。

六月朔日 快晴 大山出立。同國繼鹿尾山寂光寺觀世音へ参詣是迄尾崎伊古衛門送り

來り候事。夫より山越へ、善師野駄へ出、土田駄の入口にかけ橋あり。名物なり。見物して今渡村へ出づ。但大山よりは是迄觀音参詣廻り道と

も四里あり。是より中山道なり。

今渡より濃州伏見駅迄一里餘。夫よりみちヶ駅迄又一里餘なり。此間

惣而山道至而淋しき所也。三嶽駅入口にかゝる大寺といふあり。亦

尊葉師佛にて至而古き普請なり。

今夜当駄野口屋といふに投宿。但し越前丸岡家中西人、并に城州八幡

神應寺弟子僧を人同宿也。今日の道六里餘なり。

(以下畧之)